多人数の接触場面会話における修復と会話の進行性

－母語話者による発話の宛先変更と進行性の確保－

村上萌子(北海道大学大学院生)

1. 背景と目的

日本語教育の分野においては，日本語母語話者(NS)と非母語話者(NNS)による接触場面の調査・分析によって，NNS とのコミュニケーションを円滑化する NS の調整行動が明らかにされてきた．それらの研究の特徴として，インタビューやインフォメーションギャップ・タスクなど参加者が相手を理解することが目的となるような会話，かつ，NS と NNS のペア会話が主な分析対象となっていることが挙げられる．しかし，接触場面の実態をより詳細に明らかにするためには，それとは異なる目的や形態の会話も分析対象に加えていく必要があると考える．

そこで本研究では，制限時間内でのタスクの達成を目的とする会話，かつ NS を 2 名以上含む多人数会話の分析を行った．データの観察から，トラブルが発生し修復を開始した後に，参加者全員(特に NNS)の理解形成が確認されていないにも関わらず，修復が終了し話題が移行してしまう場面がみられた．本研究の目的は，そのような場面を可能にする手法を明らかにし，そこでの参加者の行動に影響する要因を考察することである．

2. 先行研究

2.1 接触場面における修復

接触場面における NS の他者開始修復を分析した義永(2007)は，他者開始修復は自己開始修復と比較して非優先的なものだが，接触場面では母語場面と比較してトラブルが生じやすく，他者開始修復を行わなければならない場面が多いことを指摘した．しかし，情報伝達よりも参与者間の関係を良好に保つことが重視される場面においては，観察者からみて明らかな問題が生じていても，それがトラブルとして顕在化されないまま放置されることがあるとした(義永，2007)．

接触場面における NS の自己修復を分析した雷(2021)は，日本語能力が十分でない NNS とコミュニケーションを遂行するためには NS の自己修復が重要になると述べた．そして，NNS との会話経験の多い NS は，修復に多様な技法を用い，一度の修復でトラブルが解消されなかった場合には複数回の修復を実行する一方で，経験の少ない NS は，NNS の明確な理解反応が得られなかった際に，修復を途中で中断して話題を転換することがある，と指摘した(雷，2021)．

以上のように接触場面では，母語場面よりもトラブルが生じやすく，修復はコミュニケーションを成立させるために重要なストラテジーとなる一方で，会話場面や NS の接触経験によって回避されたり中断されたりすることが示唆されている．

2.2 多人数会話における修復

多人数会話における他者開始修復の分析を行った Egbert(1997)は，多人数会話では 2 者会話では観察されない特徴的な発話連鎖が観察されることを指摘した．そして，発話連鎖の例として，トラブル源に対して複数の聞き手が修復を開始する事例や，修復が他者開始された際にトラブル源の発話者ではない他の聞き手が修復を実行する事例を示した(Egbert，1997)．

また，榎本・岡本(2010)は，コミュニケーション障がい者が参加する多人数会話における修復の分析を行った．その結果，修復の開始・実行や，修復への承諾の提示を複数の聞き手が行うという発話連鎖が観察された(榎本・岡本，2010)．榎本らは，修復を開始したり，承諾したりすることには他の参加者に自己の認知状況を明示する機能があるとし，修復の開始や承認は，当該トラブルの解消というよりも，認知状況を共有することで共通基盤化の問題に対処することを志向していると論じた(榎本・岡本，2010)．また，修復においてコミュニケーション障がい者は，トラブルに気づかない，修復に明示的に参加しないなどの理由から共通基盤化が必要な参与者として扱われないことがあると指摘されている(榎本・岡本，2010)．

以上のように，多人数会話では，2 者会話ではみられない修復の発話連鎖が観察される．また，そのような多人数会話特有の発話連鎖には参加者間の共通基盤化の問題に対処する機能があること，そして，その過程で会話において相対的に弱い立場にある参加者が周縁化される可能性があることが先行研究から示唆されている．

3. 分析データについて

本研究では，大学における国際共修科目で行われたグループワークを分析対象とする．グループワークの内容は「次回の授業で行う日本語の模擬授業に向けて，内容に関する話し合いと教材の準備を行う」というものである．各グループはNS(学部生)2，3名とNNS(留学生・中級～上級)2，3名から構成されている．

参加者は，1時間という限られた時間の中で模擬授業の内容や役割分担について意見交換をし合意を形成した上で，授業で使用する教材を作成することが求められる．また，この会話は研究のために設定されたものではないため，参加者には「指示された通りに会話に参加する」だけでなく，「タスクを完了させ成績評価を得る」という明確な会話参加の目的がある．

4. 分析結果

第1章で示したような参加者全員の理解形成が確認できない場面を分析した結果，NSの特徴的な行動として，トラブル源を発話したNNSとの間で修復が困難になった際に，別の話者に発話の宛先を変更することで，修復を実行，あるいは終了しようとしていた．その具体的な手法がみられた事例として，以下の2つを示す．

4.1 修復開始時に宛先が変更される事例

まず，修復が開始される際に宛先の変更がみられた事例として，事例1を示す．事例1の参加者は，NSの伊藤と渡辺，NNSのテイ，ケン，イムの5名である．3名のNNSはいずれも話し合いの大体の内容を理解し自分の意見を述べるのに十分な日本語能力を有しているが，話し合いの中ではNSの発話が理解できず聞き返したり，自分の発話がNSに理解されず聞き返されたりする場面が3名それぞれにみられた．なお，5名のうちケンとイムはオンラインで参加しており，伊藤，渡辺，テイの3名は基本的に2名の顔が映ったパソコン(fig.1，2参照)を見ながら話している．

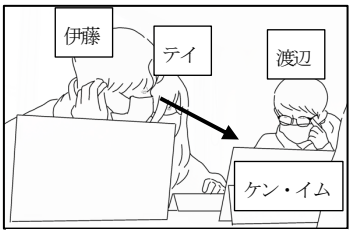

Figure 1 伊藤の視線(移動前)

事例1の参加者は，「～が好きです/嫌いです.」という文型の指導内容について話し合いを行っている．その途中で，NNSのケンは，話し合いを遮る形で授業で使用する「ドキュメント」を作成することを提案する．しかし，この「ドキュメント」という語が何を意味しているのかについて理解のトラブルが生じる．このトラブルに対して複数回の修復が行われるが，なかなか解消されない．以下の断片は，その複数回の修復が行われた後，再びケンが「ドキュメント」という語を用いて発話する場面である．

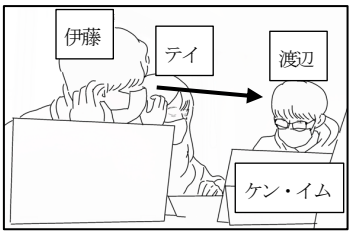

Figure 2 伊藤の視線(移動後)

02-09行目のケンの発話に対して，伊藤は「あ::↓あ.」(11行目)と理解を示すような発話をするが，その際に，伊藤の視線がケンの顔が映る画面から渡辺に向けて移動している(fig.1→2)．さらに伊藤は視線をそのままに「°はい.°」(15 行目)とケンの発話を促すような発話をするが，その後，ケンはそれ以上発話を続けない．ここで，ケン以外の参加者に期待されるのは，ケンの提案の発話に応答することである．しかし，伊藤は「°ドキュ(メント¿°)」(17行目)とトラブル源であるケンの発話の一部を上昇調で繰り返すことで，修復を他者開始する．ここでも，伊藤の視線はケンではなく，継続して渡辺に向けられていることがわかる．また，その声量はケンに届かない程度に小さい．つまり，伊藤の他者開始は，トラブル源の発話者であるケンではなく渡辺を宛先として行われていると考えられる．

```
事例1
01          (0.8)
02     ケン: まドキュメントとかをつくって,
03          (1.4)
04     伊藤: うん.=
05     ケン: =なんかそうゆう,
06          (0.9)
07     ケン: 授業(など,の)
08          (0.7)
09     ケン: なんか全部書き込もうかな.
10          (0.7)#
       Fig        #fig1
11     伊藤: *あ::↓あ.#=
       Ito   *渡辺に視線(~18)-->
       Fig            #fig2
12     ケン: =なんか[好き嫌いとか.
13     渡辺:        [+°ん?°+
       Wat           +伊藤に視線-+
14          (.)
15     伊藤: °はい.°
16          (0.6)
17 → 伊藤: °ドキュ*[(メント¿°)
18     ケン:          [でそのあとは(なん)
       Ito -->渡辺に視線*
19          (1.4)
20     伊藤: うんうん.
21          (1.2)
22     ケン: かな?
23          (.)
24     伊藤: *あ,なるほどね?*
       Ito   *渡辺に視線----*
25          (1.1)
26     伊藤: >なんか<ハンドアウトみたいなのつくるってこと¿
27          (0.9)
28     ケン: うん,
29          (0.3)
30     ケン: そう°[そう°
31     渡辺:      [+*あ::いいんじゃない.+*
32     伊藤:      [(  )
       Wat         +伊藤の方を向いて頷く-+
       Ito         *渡辺の方を向いて頷く-*
```

4.2 修復終了時に宛先が変更される事例

次に，他者修復が実行された後，宛先の変更がみられた事例として事例2を示す．事例2の参加者は，NSの佐藤と高

橋，NNS のオウとキムである．事例 1 と同様に，2 名の NNS は話し合いの大体の内容を理解するのに十分な日本語能力を有しているが，NS の発話を聞き返したり自分の発話を NS に聞き返される場面が何度かみられた．特に，事例 2 のトラブル源の発話者であるオウは，他の参加者と比較して，自身の発話が聞き手に理解されず修復が開始されることが多かった．

事例 2 の参加者は，「～が好きです.」という文型をどのように学習者に説明するかについて話し合っている．01-02 行目で NNS のオウが「英語で説明する」という方法を提案するが，これがトラブル源になり，04 行目から 13 行目にかけて 2 回の修復が実行される．背景情報として，模擬授業では英語などの媒介語を用いずに日本語のみで説明をするように指示されている．このような指示とオウの提案の不一致も，事例 2 において修復が行われた原因になっていると考えられる．

13 行目までに 2 回の修復が実行され(05，11 行目)，それに対して佐藤は「あ:」(14 行目)と理解を示す．佐藤は，続けて 14，17，18 行目でオウの提案の意図として「英語圏で授業を行うという前提で模擬授業を行うため，全て英語で説明する」という理解候補を提示することで，3 度目の修復を他者開始する．しかし，それに対して応答がないため，佐藤は 21 行目で他者開始を繰り返し，オウに応答を求める．

再度応答を求められたオウは，「え::と::.h.h ちょっと::ss せせつめいしにくい¿ですｈ.h 日本語で.」(23，24 行目)と応える．佐藤はこの発話を「「～が好きです」という文型は日本語で説明しにくい」と解釈し，「でも(.)ね.説明自体が日本語になっちゃう(よ.ですよね.多分.)」(25，26 行目)と発話する．これは，オウの意見に対して，「(授業は日本語で行うよう指示されているので，)説明自体が日本語になる」と主張することで，オウの提案を却下するものである．佐藤はここまで，修復を開始する際には必ずオウに視線を向け，発話の宛先としていた．しかし，25 行目の発話で佐藤は視線をオウからキムに移す(fig.3→4)．さらに，「ですよね」(26 行目)と確認を求める文末表現を付け足していることから，キムからの承認を強く求めている様子がみてとれる．実際に，この確認に対して，キムは「ん::::.そ:です(けど)：.」(27 行目)と応答している．つまり，ここで佐藤はオウに代わってキムからの承認の応答を得ることで，修復の発話連鎖を閉じていると考えられる．

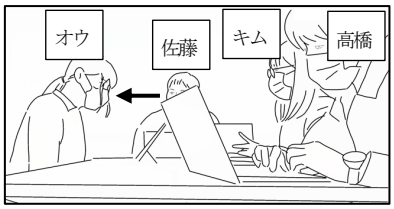

Figure 3 佐藤の視線(移動前)

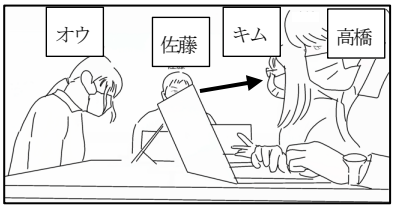

Figure 4 佐藤の視線(移動後)

```
事例 2
01    オウ: 英語↑で(0.3)ら-like,lo:ve,なんで:(0.4)わたしは:え:=
02    オウ: =(0.5)英語↑で説明します.
03        *(1.5)
      Sat *オウに視線(~07)-->
04    佐藤: 英語で?
05    オウ: え-え-英語¿(.)で説明しますか¿
06        (0.3)
07    佐藤: そこを?*
      Sat -->オウに視線*
08        (0.6)
09    オウ: え::と,
10        (1.2)
11    キム: この[表現を英語で.
12    オウ:     [hh
13    オウ: はい.
14    佐藤: あ:[hh だから[*そもそもあれ¿だからえ-英語,圏,*の*[(.)=
15    オウ:    [hhhh    [h
16    キム:    [ん::hhh                                    [ん::hh
      Sat                *オウに視線-------------------*キムに視線-*
17    佐藤: =ところで日本語の授業してるから,(.)その:説明は全部=
18    佐藤: =英語でっ*てこ(h)と(h)¿[hh*
19    オウ:                         [hhh
      Sat          *オウに視線-------*
20    キム: え?hh
21    佐藤: *え?そうゆうこと?
      Sat  *オウに視線(~25)-->
22        (0.5)
23    オウ: え::と::.h.h ちょっと::ss せせつめいしにくい¿ですｈ.h=
24    オウ: =日本語#[で.
25 →  佐藤:          [でも(.)ね. *説明$#自体が日本語になっちゃう=
      Sat ---------->オウに視線*キムに視線----------------->
      Kim                          $佐藤に視線------------->
      Fig         #fig3              #fig4
26 →  佐藤: =(よ.ですよね.$多分.)*
      Sat ---------->キムに視線*
      Kim ---->佐藤に視線$
27    キム: ん::::.そ:です[(けど):.
28    佐藤:               [まあまあまあまあんま深いこと考えとか(.)んで=
29    佐藤: =いいんじゃないですか.*$みんなわかるんで.*$[°日本語°.
30    オウ:                                             [+hhhh+
31    キム:                                             [hhhh 日本語だけ=
      Sat                        *キムに視線-------*
      Ou                                              +頷く-+
      Kim                        $頷く-------------$
32    キム: =でもいいんじゃ(h)な(h)い(h)[で(h)す(h)か(h).
33    オウ:                             [hhhhhh
```

5. 考察

5.1 発話の宛先変更による進行性の確保

Heritage(2007)は，会話参加者は人と場所の認識探索において，間主観性と会話の進行性という相反する 2 つへの志向のうち，どちらをより優先するのかという相互行為上の課題に直面していることを論じた．また，Stivers & Robinson(2006)は，多人数会話での「質問の宛先とされた聞き手以外の聞き手が質問に応答する」という発話連鎖について，参加者の会話の進行性への志向が影響していることを論じた．これらの指摘から，会話中でトラブルが生じた場面においても，修復を完了させ参加者間の共通理解を形成することと，修復によって会話が中断するのを防ぎ進行性を確保することという 2 つの志向のうち，どちらを優先させるかという相互行為上の課題が，会話参加者が対処すべきものとして存在すると考える．

事例 1 では，伊藤の発話の宛先が，NNS のケンから NS の渡辺に変更されていた．事例 2 では，佐藤の発話の宛先は NNS の

オウから同じくNNSのキムに変更されていたが，それまでの会話で沈黙や言い淀みの多いオウに対してキムは自ら発話順番を取ることも多く，オウと比較して会話の理解力が高いと判断可能である．つまり，修復の過程で，NSの発話の宛先がトラブル源の発話者からより理解力の高い(とみられる)話者に変更されている．ここから，事例中のNSの行動は，より意思疎通が容易な話者を発話の宛先とすることで，会話の中断が続いたり新たなトラブルが生じたりするのを防ぐことを志向するものだと考える．ただし，事例1では，宛先の選択に言語能力の差異ではなく，オフライン／オンラインという参加方法の差異が影響してる可能性もある．

以上のように，修復中に発話の宛先を変更するというNSの行動は，共通理解の形成と会話の進行性のうちどちらをより優先するのかという相互行為上の課題に，後者を優先させる形で対処する手法だと考えられる．

5.2 会話の目的が参与者の志向に与える影響

榎本・岡本(2010)は，多人数会話特有の修復の発話連鎖に，参加者間の共通基盤化の問題に対処する機能があると論じていた．しかし，本研究の分析事例でみられた発話連鎖は，それとは反対に，参加者の理解形成よりも会話の進行性を確保しようとするものであった．そのように，分析事例において理解形成よりも進行性を優先しているとみられる場面が多く観察されたことには，会話の目的が影響していると考える．インタビューやインフォメーションギャップ・タスクのような共通理解の形成を目的とした会話の場合，会話の進行性を優先させ，共通理解の形成がなされないまま会話を進めれば，最終的な目的を達成することはできない．一方で，分析事例のような意見交換と合意形成を目的としたタスクを行う会話では，共通理解の形成のために会話の進行性を犠牲にしていると，最終的な目的を達成できない可能性がある．また，一部の参加者の意見について共通理解を形成できていなくても，他の意見で合意を確認することができれば会話を進行させることができる．そのため，本研究で分析したグループワークのような会話では，共通理解の形成よりも会話の進行性を確保することへの志向が強くなるのではないだろうか．

また，接触場面では，言語能力の差異からトラブルが生じやすく，修復が完了するまでに時間がかかったり，新たなトラブルが生じたりすることもある．そのため，母語場面と比較して，進行性が阻害される場面が生じやすく，それを回避するために参加者が会話の進行性を確保することを志向しやすいと考える．

加えて，分析事例では，上記のような場面で参加者が会話の進行性を確保しようとする際に，常にトラブル源の発話者はNNSであり，NNSの発話に関する理解形成が犠牲になっていたことに注目する必要がある．これは，榎本・岡本(2010)の指摘と同様に，相対的に弱い立場にある参加者が共通基盤化が必要な者として扱われないことを示唆している．

6. 結論

トラブルの生じやすい接触場面において，NSによる修復は円滑なコミュニケーションを行う上で重要である．しかし，本研究の結果は，制限された時間の中で意見交換と合意形成を目的とするようなタスクを行う会話においては，修復による共通理解の形成が必ずしも優先されるわけではないことを示している．また，NSによる進行性の確保によって，会話で相対的に弱い立場にあるNNSの理解が犠牲となることは，接触場面における対等な会話参加を実現する上で留意すべきであろう．

今後は，母語場面や異なる目的の会話との比較を通して，共通理解の形成と会話の進行性への志向が参加者の振る舞いに与える影響について分析を進めていく．また，進行性が優先されやすい会話において，一部の参加者(特にNNS)が周縁化されることを防ぐために必要な話し合いのデザインについても，今後検討していきたい．

参考文献

Egbert, M. M. (1997). Some interactional achievements of other-initiated repair in multi-person conversation *Journal of Pragmatics*, **27**(5), 611-634.

榎本美香・岡本雅史(2010). 多人数会話において修復はどのように生じるか―コミュニケーションにハンディキャップを抱える人を含む雑談データと通じて― 日本認知科学会第27回大会発表論文集, 366-375.

Heritage, J. (2007). Intersubjectivity and progressivity in person (and place) reference *Person reference in interaction: Linguistic, cultural and social perspectives*, Cambridge University Press, 255-280.

雷雲恵(2021). 相互行為の参与者はどのように発話のトラブルに対処するか―接触場面における日本語母語話者の「自己修復」に着目して― 文教大学大学院言語文化研究科紀要, **7**, 79-101.

Stivers, T. & Robinson, J. D. (2006). A preference for progressivity in interaction *Language in Society*, **35**(3), 367-392.

義永美央子(2007). 日本語の接触場面における他者開始修復とポライトネス 多文化社会と留学生交流: 大阪大学留学生センター研究論集, **11**, 1-14.